2024年10月1日
LINE通信

水を噴き出した本能寺のイチョウ

本能寺の表門に向かって左手に、寺名が彫られた石碑が立っていますが、その「能」のツクリの部分は「去」に変えられています。決して、「この字、間違ってる！」なんて言わないように。

本能寺と言えば、織田信長が明智光秀に奇襲され、最期を迎えた「本能寺の変」
本能寺には１本の大きなイチョウ（銀杏）が、境内にあります。

実はこのイチョウには、あるひとつの伝説が残されているのです。
町が火に包まれ、猛火から本能寺の境内に逃げてきた人々は、イチョウの木の下に身をひそめていました。火は本能寺にも迫って境内を焼き、本堂にも火が回り始めました。と、その時です。
突然、イチョウから勢いよく水が噴き出し、その水によって、本堂やその他の建物は延焼を免れ、イチョウの木の下に避難していた人々も助かったと言われています。
以来、人々の間で**『火伏せのイチョウ』**と呼ばれるようになりました。
水分の多い樹木が熱せられると、葉の表面に水が浮いてくるのだそうです。なので、このイチョウから水が噴き出すことはなかったにしろ、火事の熱で、葉に水分が浮き出て、濡れた状態になったと考えられるのです。

寺名にある「能」という漢字のツクリの部分に“ヒ”が縦に２つありますが、それが“火火”と解釈され、縁起が悪いことだとされ、そこで、ツクリの部分を“去”に変えて、「ヒ（火）が去る」という意味を「能」に持たせ、それを寺名として表記するようにしました。それ以来、火難は起きていないそうです。

ジョブカフェさくら